

山形県における花笠踊りの受容と変遷

貝沼 良風

Abstract

This study analyzes the propagation and change of parades in which the Hanagasa dance is used, using the Hanagasa dance in Yamagata Prefecture as a case study, and examines the existence of local culture in the present day. The Hanagasa dance originated from songs and dances performed during irrigation works in Yamagata Prefecture. Consequently, Hanagasa dance parades continue to be held today in regions where these irrigation practices were historically conducted, reaffirming these areas as the dance's birthplace. Meanwhile, in Yamagata City, a new Hanagasa dance based on dances from other parts of the prefecture was created for the purpose of local promotion, and a parade is held there. Since the Yamagata Hanagasa Festival parade began, Tendo City and Yonezawa City have also held Hanagasa dance parades as their summer events. While some of the Hanagasa dance parades that have spread in this way continue to be recognized as local events, others have ceased to be held due to the reorganization of the festival's content. This suggests that the selection of symbols other than the Hanagasa dance to represent the local area has allowed the festivals to emphasize their local characteristics.

キーワード……地域文化 花笠踊り パレード 祭り 山形県

1 はじめに

各地域において執り行われる祭りでは、神輿の渡御や踊りの行進、芸能の披露などの催しがみられる。地域の祭りにおける踊りや芸能などの中には、観光振興を目的として創出され、現在では地域に欠かせないものとして捉えられ、地域の祭り以外のイベントにおいて披露されることも少なくない。地域を表象するものは、発祥地はもちろんのこと、その周辺の地域でも用いられることもある。そのため、そうした踊りをはじめとした地域文化が、発祥地や周辺の地域においてどのように継承されたり、受容されたりしてきたかを捉えることは、地域文化の特質を検討する上でも重要である。

踊りや芸能をはじめとした、地域を表象するようなパフォーマンスを用いた祭りは、主に近代以降、自治体や商工会といった行政機関が運営の主体となり、その地域における住民の結束や、観光客の誘致を目的として催されてきた（阿南 1986）。そのため、こうした祭りでは、住民に地域に対する意識を持たせるような催しが執り行われてきた。阿南（1986）は都市における時代まつりを、自治体が、その都市にゆかりのある人物を登場させることによって、共同性

のシンボルとしての歴史を提供していると述べている。伝統的な価値観による紐帯を持たない近代社会における共同性のシンボルの提供が、近代以降につくられた祭り、その祭りの主催者にとって重要であったといえる。

こうした地域の祭り、とりわけ自治体が主催する祭りにおける共同性のシンボルとして、歴史だけでなく、踊りや芸能をはじめとした民俗文化にも注目が向けられる。たとえば森田（2022）によると、沖縄県の各集落で伝承されていたエイサーは、1956年に「全島エイサーコンクール」が開催されたことで、沖縄県内外を問わず、沖縄を代表するパフォーマンスとして捉えられるようになった。今日では、各地域のエイサー団体による踊りの共演は「沖縄全島エイサーまつり」に引き継がれるとともに、沖縄県のさまざまな催しにおいてエイサーは披露されている。

踊りをはじめとしたパフォーマンスの地域の祭りへの伝播に関する研究は、地理学や民俗学に蓄積がみられる。松平（1996）は阿波踊りの東日本における普及について、商店街の活性化を狙った展開であることや、踊りの振りや音楽といった内容を変化させやすく、地域性を強調しないことを要因として挙げている。内田（2001, 2002）は、高知市ではじめられたよさこい祭りが札幌市をはじめとした県外へと伝播したことについて、よさこい祭りは地理的な距離によらない伝播が生じていると説明している。よさこい祭りの伝播先には、イノベーターがいたことや、執り行われる舞台に都市的地域が多いこと、新しい祭りを模索していることといった共通点が示された。矢島（2015）はよさこいの伝播について、各自治体における住民結束の機会の希求と、よさこい踊りの導入や各地域の要素を取り入れることの容易さが重なり、全国的な規模での伝播が生じたことを明らかにしている。

このように、主催者が導入する動機と、地域性に縛られないという踊りの性格によって、踊りをはじめとしたパフォーマンスは、発祥地やその周辺地域にとどまらない伝播がみられるようになった。そして、伝播した踊りは、伝播先の要素を取り入れることが容易であったことが明らかにされた。しかし、踊りをはじめとしたパフォーマンスの伝播については、たとえば内田（2002）は北海道各地と首都圏におけるねぶたの受容の過程の中で、他の地域における踊りを導入しようとしながらも根付かなかったことを明らかにしている。また 20 世紀末にはそうした踊りの伝播が拡大しなくなったことが示されている（松平 2008）。こうした踊りが伝播される中で、伝播先において受容されなくなる理由を捉えることが求められる（阿南 2021）。

以上のように、各地域での近代化と観光振興を契機とした踊りや祭りの伝播と定着について研究されてきた。一方で、こうした伝播した地域文化は、各地域で一時は受容されながらも用いられないという選択肢が存在していたことも先行研究において示唆されてきた。こうした踊りをはじめとした地域文化の特質について、その文化の取り入れを止める事例を通じて検討することが重要ではないだろうか。

本研究において事例とする花笠踊りは、一時期山形県内の多くの自治体で取り入れられたが、現在は花笠踊りを主体としたパレードが行われていない自治体が見られる。こうした自治体に

よる踊りの取り入れ方の変化を追うことは、地域文化の受容と変遷を捉え、その文化の特質を考える上で有効であるといえるだろう。

よって本稿では、山形県の地域文化の一つである花笠踊りに注目して、その踊りが行われるパレードの受容とその変遷を分析、考察することを目的とする。本稿においては山形県の自治体のうち、尾花沢市、大石田町、山形市、天童市、米沢市（図 1 参照）における自治体が主催する祭りを事例とする。詳細は後述するが、尾花沢市と大石田町は花笠踊りの発祥、または元祖と称して踊りのパレードが催されてきた。他の市については、地域振興の祭りにおける催しとして花笠踊りによるパレードが企画された自治体として選定した。

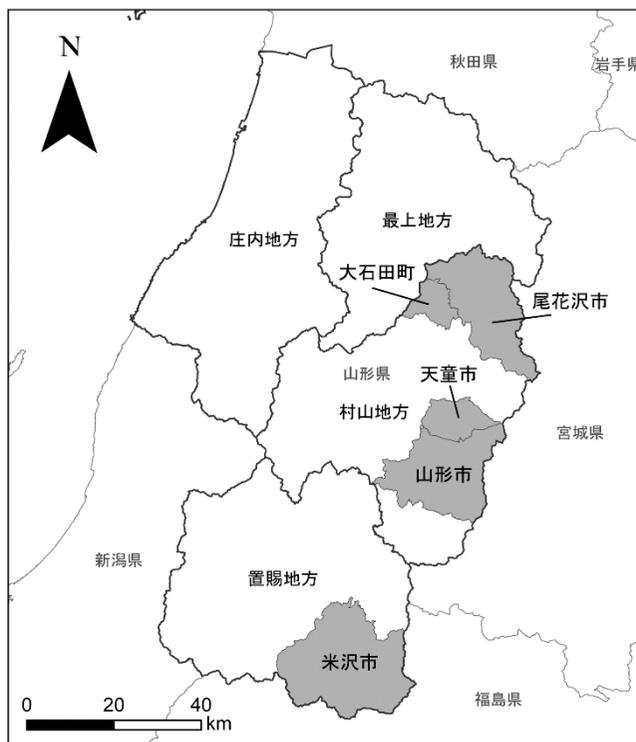


図 1. 研究対象地の位置

(出所) 筆者作成。

具体的には、花笠踊りのパレードが執り行われるようになった 1950 年代後半において、山形県における各市町村で行われた夏祭りなどでのパレードの開催状況を明らかにする。また、花笠踊りによるパレードには踊り手が団体として参加する。そのため、花笠踊りのパレードの内容の変化をさらに捉える視点として、特に山形市の山形花笠まつりにおける参加団体の変遷を確認する。その上で、各地域での花笠踊りの言説やパレードの内容から、各市町村において花

笠踊りがどのように用いられているかを分析することで、花笠踊りの山形県内での受容とその変遷の過程を考察する。分析には、各自治体の広報から、花笠踊りによる催しについて取り上げている記事を抜粋したものを使用した。加えて、大石田町については祭りの開催年当時のパンフレット、山形市についてはパレードの進行表も分析に使用した。

本稿では以下の手順で議論を進める。2章では、花笠踊りについて、その由来や踊りの種類を概観する。3章では5つの市町の祭りについて、花笠踊りによるパレードの開催状況を示していく。4章では県内の花笠パレードを代表するものとして山形市における山形花笠まつりに注目し、参加団体の変遷を確認する。5章では3章と4章の分析を踏まえて、山形県内における花笠踊りがどのように伝播し、そして踊りによる催しがどのような変遷を辿ったかを分析することで、山形県における花笠踊りの受容と変遷について考察する。

2 花笠踊りの概観

花笠踊りは紅花を模した飾りがつけられた笠である花笠を使い、花笠音頭という歌に合わせて踊られるものである。星川（1983）によると、山形県尾花沢市における、水田開墾のためにつくられた人工湖である徳良湖の築堤工事における、単調な作業の際に労働者が歌った「土搗唄（どんづきうた）」と「土搗踊」が花笠音頭および花笠踊りの発祥とされている。笠を廻す動作は、作業中の労働者に風を送る所作からくるものとされている。上記の踊りの発祥に関する記述は、山形花笠まつり30年史刊行委員会（1992）においてもみられる。1921（大正10）年には、徳良湖の築堤工事を行った耕地整理組合によって、尾花沢市の諏訪明神の秋祭りにおける神輿渡御、山車、大名行列といった催しの中に、花笠踊りが加えられた（星川 1983）。この秋祭りの行列以降、踊りに用いた笠に紅染めの造花がつけられるようになり、やがて花笠踊りと呼ばれるようになる（尾花沢市史編纂委員会 2010）。

踊り方は地域ごとに異なり、10種類余りある。たとえば尾花沢市には、笠廻しと呼ばれる踊りがある。この踊りには、安久戸・原田・二藤袋・上町・寺内の5つの種類の踊りがみられる（星川 1983; 尾花沢市史編纂委員会 2010）。こうした山形県内各地の踊りをもとに1963年につくられた踊りは「正調花笠踊り」と呼ばれ、山形花笠まつりで踊られる基本形とされている。山形花笠まつりでは、尾花沢市の笠踊りや各参加団体がアレンジした踊り、1984年に初めて考案され披露された花笠太鼓も披露される。大石田町では、同町出身で練り物の企業を東京に設立した社長を中心として考案された、「手踊り」と呼ばれる踊りもみられる。

3 山形県内での花笠踊りの伝播

花笠踊りを用いた祭りは県内各地で行われてきた。山形花笠まつり30年史刊行委員会（1992）では15市町の夏季の祭りで花笠踊りが用いられていたことを示している。本章ではこうした花笠踊りが用いられている自治体の祭りのうち、5つの市町における祭りを分析していく。

3-1 尾花沢市

尾花沢市では、花笠踊りの主要な種類の 1 つである笠廻しの踊りが行われてきた。2 章で示した通り、1921 (大正 10) 年から諏訪明神の秋祭りで花笠踊りが披露されていた。その後、1956 年以降は、花笠踊りを用いた催しは諏訪明神の秋祭りの一部としてではなく、尾花沢市が主催する祭りの中で行われるようになった。1956 年の『町報おばなざわ』では、「尾花沢まつり」を終えて」という記事において当時の町長の挨拶が掲載されている。その記事の中で、「九月二日の大名行列並びに今年から始めて行われた花笠踊り競演大会も… (中略) …合併以来の盛況であった事と存じております」²⁾という記載がみられることから、1956 年に尾花沢まつりにおいて花笠踊りが企画されたことがわかる。さらに、1957 年の『町報おばなざわ』には、「尾花沢まつり 花笠踊 仮装行列出演者募集」³⁾という記載がみられる。このことから、花笠踊りのパレードがこの年から執り行われるようになったことがわかる。

1959 年の『市報おばなざわ』における花笠踊りの出演者募集を募る記事では、「手振踊り」と呼ばれる別のかたちの踊りも募集されていた⁴⁾。この記事には、手振踊りは「東京紀文商店」による指導によるものと記載されている。このことから、前章で示した大石田町出身の食品製造業の社長考案のものも用いられていたことが読み取れる。この年以降の尾花沢市の広報誌では、手踊りによる花笠踊りのパレードの写真が多く掲載されるようになる。この傾向は 1969 年まで続くが、1970 年以降は、笠廻しの踊りの写真が掲載されるようになる。今日においては、尾花沢市の花笠踊りは、笠廻しによるものが中心である。

また、花笠踊りは尾花沢市の催しとして活用されている。たとえば、尾花沢まつり以外にも、徳良湖が完成した日に執り行われる徳良湖まつりにおいても花笠踊りが披露される。徳良湖まつりがはじめて執り行われたのは 1969 年である。1970 年 5 月の『市報おばなざわ』では、第 2 回目の徳良湖まつりの様子の記事が掲載されている⁵⁾。この催しでは笠廻しの花笠踊りが披露されたことが記事から読み取れる。

尾花沢まつりは、1996 年には「おばなざわ花笠まつり」と、祭りの名称に花笠という言葉が用いられるようになった⁶⁾。1996 年から 2 年間は 8 月 14、15 日に開催日が変更されたが、1998 年にはおばなざわ花笠まつりという名称はそのままに 8 月 27、28 日に開催日が再度変更された。以降のおばなざわ花笠まつりは、1 日目に上述した諏訪神社の例大祭が、2 日目に花笠踊りによるパレードが行われるという構成となっている。

3-2 大石田町

大石田町では、大石田まつりという自治体主催の祭りが 1931 年から執り行われている。『町報おおいしだ』によると、1957 年に行われた第 24 回の祭りから、花笠踊りがコンクールとして取り入れられた⁷⁾。以降、昼は花笠踊り、夜は灯籠流しと花火大会が行われるようになる。用いられた踊りは、笠廻しの踊りと前章で示した同町出身者が考案した手踊りである。

1958年の花笠踊りの競演大会は32チーム、400人超の踊り手が参加した⁸⁾。コンクールに入選している団体をみると、婦人会や子供会といった地縁による団体が多く参加しているといえる。1961年以降は町内のパレードを中心としたものへと開催内容が変更された⁹⁾。この変更を踏まえ、踊りの審査は行われなくなる。1967年の大石田まつりでは花笠踊りを取りやめ、灯籠流しと花火大会を中心とした祭りに変更された。取りやめの理由には、「経費がかかりすぎる、見物人を集めることが困難」¹⁰⁾といった原因が広報おおいしだに記載されている。しかし、この翌年には花笠踊りは再度祭りの催しとして執り行われた¹¹⁾。

以降も花笠踊りのパレードは継続され、約40～50団体、400～700名ほどの踊り手が参加した。その中で、1971年7月の『広報おおいしだ』の祭りの開催予定を知らせる記事において「伝統ある大石田まつり」¹²⁾という文言がみられた。

祭りにおけるパレードが続けられる中で、1983年には踊りの型が統一される動きがみられた。1983年の7月の『広報おおいしだ』では、「大石田まつり 花笠おどりを手おどりに統一」¹³⁾というタイトルで、花笠踊りの踊り方を手踊りに統一する知らせとその踊り方が掲載された。この手踊りへの統一に伴い、大石田花笠踊元祖会が結成されたことが1983年9月の広報に記されている¹⁴⁾。この年以降、大石田まつりでは手踊りがパレードで用いられるとともに、大石田まつりでの花笠踊りのパレードは「元祖花笠踊り」と町の広報で称されるようになった。

催しの内容はコンクールからパレードへ変更され、踊りは手踊りに統一されるという経緯を辿りながら、大石田まつりにおいて花笠踊りのパレードが執り行われていた。しかし、2001年にこの動きに変化が生じる。2000年に、大石田まつりに関して、町民を公募するかたちで「大石田を10倍楽しくする会」が設置された¹⁵⁾。この会議は大石田まつりをより魅力的なものにすることが目的である。第1回会議では、前夜祭の提案、花笠踊りの観客の少なさや子どもの参加が義務的になっているのではといったことへの意見が示されていた。この会議が開かれる中で、大石田まつりに前夜祭を設けることが決められた。そして、2001年には大石田まつりの前夜祭として維新祭という催しが執り行われるようになる¹⁶⁾。

大石田まつりの前夜祭として執り行われることとなった維新祭では、市民によるバンド演奏やダンス、踊り、太鼓の披露がJR大石田駅の駅前の広場で催される。その催しの演目の一つとして、花笠踊りは披露されるようになった。この動きの中で、今日では大石田まつりでは花笠踊りのパレードは行われなくなり、花笠踊りは維新祭のみで披露されるようになった。

3-3 山形市

山形市においては山形花笠まつりの主要な催しとして花笠踊りのパレードが執り行われている。山形花笠まつりは1963年に蔵王温泉の観光振興のために催された蔵王夏まつりのイベントである「花笠音頭パレード」として執り行われたものが発祥である（山形花笠まつり30年史刊行委員会1992）。その2年後、パレードが蔵王夏まつりから分離し、山形花笠まつりとい

う単独の祭りとして行われ、現在まで執り行われている。

当初山形花笠まつりは山形県の企業である山形新聞社によって運営されていたが、1993 年からは山形商工会議所内に設置された山形花笠協議会によって運営されている。山形花笠協議会は毎年の祭りの企画を行い、実際の運営は協議会が設置する山形花笠まつり実行委員会が担う。また、協議会の下部組織として、山形県内の日本舞踊の師範などによって構成される山形花笠舞踊団がある。山形花笠舞踊団は、協議会の仲介を受けての踊りの指導や、県内外のイベントにおける踊りの披露といった宣伝、普及に関わる活動を行っている。

3-4 天童市

天童市において花笠パレードが行われたのは 1970 年からである。天童温泉の開湯 60 周年に企画された温泉夏まつりにおいて、初めての花笠パレードが行われた（市制施行五十周年記念誌編集委員会 2008）。以降、天童市では 8 月上旬に花笠踊りのパレードが執り行われることとなる。パレードのコースは毎年異なるものであったが、『市報てんどう』におけるパレード開催を知らせる記事を見ると、温泉通りが主なコースとなっていた¹⁷⁾。踊りの種類について規定を確認することはできないが、市報のうち、祭りが開催されたのちに発行されたものの記事の写真をみると、笠廻しと正調花笠踊りがどちらも披露されたことが読み取れる¹⁸⁾。

1991 年からは天童夏まつりが開催され、天童市の特産である将棋の駒を表現した将棋みこしのパレードとともに、花笠パレードが開催された（市制施行五十周年記念誌編集委員会 2008）。市制施行五十周年記念誌編集委員会（2008; 570）では「恒例の花笠パレード」と表現されていることから、花笠パレードは天童夏祭りの主な催しとされていることが読み取れる。花笠パレードは現在も開催されており、新型コロナウイルスの感染拡大を受けて 3 年間中止されたのち、2023 年には 30 回目の天童夏まつりにおいて花笠踊りのパレードが開催された。

3-5 米沢市

米沢市では 1988 年に、米沢夏まつりにおけるイベントの一つとして「米沢花笠まつり」がはじめられた。開催された理由について、当時の米沢市の広報誌である『広報よねざわ』において以下の通りに記されている。

昭和 56 年に歴史的な火祭りとして新たな催しを連動させた夏まつりとしてスタートした“愛宕の火まつり”は、市街地における催事がいま一つ盛り上がりには欠け、市民ぐるみのまつりとして定着しきれない現状にあります。そこで、米沢四季のまつり実行委員会では、その改善策について協議を重ねた結果、数百年の伝統をもつ愛宕の火まつりは愛宕神社や西部火まつりの会の主導でこれまで同様実施することにし、市街地における催事は新たに東北四大まつりとして知られ、県民にも親しまれている“花笠おどり”を

導入、夏のイベントとして市民がともに楽しめるまつりに育てていくことになりました¹⁹⁾。

以上の記載から、山形市の山形花笠まつりに着目し、既存の祭りの盛り上がりを改善するために花笠踊りを導入したことがわかる。またこの時期には、花笠踊りは県民にも親しまれているものとして表現されていることがうかがえる。以降、花笠踊りのイベントは輪踊りからパレードへの内容の変更を伴いながら、1000人以上の踊り手が参加する催しとして継続されていく。

しかし、14回以降、花笠まつりによる催しは執り行われなくなる。2001年の『広報よねざわ』をみると、2001年の7月に米沢市における歴史的人物である上杉鷹山の生誕祭である「上杉鷹山公生誕市民祭」が執り行われた²⁰⁾。その際に民謡流しに組み込まれたと考えられる。この祭りの内容は、翌年に開催された、「上杉鷹山公生誕祭」に引き継がれている。

「上杉鷹山公生誕祭」の目的については『広報よねざわ』1163号において、「上杉鷹山公生誕市民祭」の盛況と感動を大きな契機として、今後一年に一度、上杉鷹山の誕生日を祝い、その遺徳を偲ぶまつりとして、既存のお祭りを効果的に集約させながら創り上げていくため」という記載がみられる。こうした動きは、米沢市における自治体主催の祭りが再編と捉えることができる。その再編の中で、米沢花笠まつりは、毎年4月29日に開催されていた米沢民謡流しとともに、「民謡パレード」として実施されることになった。踊り手の募集する広報の記事には、実施する踊りとして新花笠音頭、米沢花笠音頭といった名称が記載されている²¹⁾。

2005年には、鷹山公生誕祭の内容が米沢上杉まつりに統合され、花笠踊りは4月29日の開幕パレードを構成する踊りの一つとなった²²⁾。また、2007年における米沢上杉まつりの開催を知らせる広報の記事には花笠踊りの記載はみられない。このことから、以降の上杉まつりでは、民謡流しの一部として、花笠踊りは披露されるようになったと捉えられる。

3-6 小括

上記で示した5つの市町における花笠踊りを取り入れる経緯には、踊りの発祥地としての取り入れと、地域振興のための取り入れといったものが挙げられる。花笠踊りは徳良湖の築堤工事において歌われた音頭と、その音頭に合わせた踊りが由来である。この工事が行われた尾花沢市と近隣の大石田町では、今日でも踊られる花笠踊りの原型がみられる。こうした踊りが尾花沢市と大石田町で取り入れられ、地域の祭りにおける恒例の催しとなった。

地域振興のための取り入れについては、発祥地からその周辺の地域に踊りが伝播したといえる。山形市で開催される山形花笠まつりでは、尾花沢市を発祥とする笠廻しの踊りとともに、山形県内各地の踊りをもとにつくられた正調花笠踊りが主に用いられてきた。そしてこの正調花笠踊りは米沢市や天童市でも用いられる。また、天童市では温泉の開湯を記念した催しとして、米沢市では夏における既存の祭りを盛り上げるためのものとして花笠踊りが用いられた。

こうした経緯によって催されるパレードは、継続されているものがある一方で、祭りの中で花笠踊り単体のパレードとして執り行われなくなったものがみられる。花笠踊りの発祥地とされる尾花沢市では、祭りの名前に用いられるようになるとともに、花笠踊りのパレードはおばなざわ花笠まつりの主な催しとなっている。天童市でも、花笠踊りによるパレードは、将棋駒のかたちを模したみこしのパレードとともに、天童夏まつりにおける主要な催しとなっている。一方で花笠踊り単体のパレードとして行われなくなった大石田町と米沢市では、大石田町は花火大会、米沢市はゆかりのある歴史上の人物に関する催しをメインとした祭りに再編された。

4 山形花笠まつりにおける踊り手団体の変遷

本章では、山形市における山形花笠まつりに注目し、パレードに参加する団体の変遷を確認する。山形花笠まつりには、子供会などの地縁組織や、小・中学校、高校、専門学校、大学といった学校、行政組織、企業などがそれぞれ 20 人から 200 人の踊り手による団体を結成して参加する。この団体の中には、県人会による参加や、踊りやダンスの教室やサークルによる参加もみられる。本章では、山形花笠まつりにおける参加団体の数と種類の変遷を、山形県花笠協議会（2012）および 2013 年度以降のパレードにおける参加団体の進行順とその予定時刻が記載されているパレードの予定表から捉えていく（表 1 参照）。

表 1. 参加団体数の変化

	1963	1967	1972	1977※	1982	1987
地縁組織	5	23	19	13	19	15
企業・行政組織・病院	14	41	49	26	45	43
学校	0	0	2	6	6	3
踊り・ダンス教室	4	3	8	10	26	23
県人会	0	0	1	0	2	1
市町名での登録	1	15	1	0	0	1
その他	0	1	8	6	14	13
合計	24	83	88	61	112	99

	1992	1997	2002	2007	2012	2017
地縁組織	13	8	9	4	7	5
企業・行政組織・病院	45	47	37	48	56	72
学校	1	5	14	21	42	31
踊り・ダンス教室	20	12	17	24	30	37
県人会	1	2	5	3	3	2
市町名での登録	3	1	0	0	0	0
その他	10	7	8	18	10	5
合計	93	82	90	118	148	152

※1977年は全3日中3日目が雨天中止となっている。

（出所）『山形花笠まつり：舞った魅せた50年—山形花笠まつり50年のあゆみ』50頁-71頁、2017年度山形花笠まつりパレード予定表。

参加団体数をみると、山形花笠まつりは開始された1963年以降、1983年まで増加している。特に地縁組織と企業、行政組織の参加数が多い。地縁組織は山形市と周辺の市町の婦人会や、山形市内の子供会が中心である。また、「上山市」や「米沢市」などといった市町名での団体の参加がみられたが、山形花笠まつり30年史刊行委員会（1992）には第1回で参加した上山市について婦人会が中心であったとする記述がみられる。このことから市町名で登録されている団体は市の職員だけでなく、諸地縁組織をまとめた一つの団体として参加していたといえる。

1970～1980年代では、団体観光客のグループによる参加が顕著にみられる。しかし、1983年から1997年までの期間には、参加団体数が減少する。内訳をみると、企業の参加が2002年まで減少していることがわかる。同様に地縁組織の参加も減少がみられ、団体数の回復は2012年における増加以外にはみられない。

2002年からは再び参加団体数が増加していく。中でも学校や、ダンスや舞踊の教室・サークルの参加の増加が顕著である。学校の参加数は1997年まで一桁台であったが、2002年以降に急増し、2012年には全148団体中42団体となっている。またダンスや舞踊の教室・サークルについては、この頃から日本舞踊の団体だけでなく、ダンス教室や山形花笠踊りの披露を志向するサークルの参加がみられるようになる。2007年からは企業の参加も再び増加するとともに、病院による参加もみられるようになった。2017年度現在の参加団体は、合計で152団体であった。そのうち、踊り志向団体は35団体、学校団体は31団体、社縁団体は62団体、地縁団体は5団体、そして県人会は2団体であった。

このように、山形花笠まつりは当初企業および地縁組織の参加によってパレードが執り行われていた一方で、近年では学校や、ダンス教室・サークル、病院といった多様な団体がパレードに参加しているといえる。

5 花笠踊りの受容と変遷

本章では、3章で分析した5つの市町花笠踊りのパレードの開催状況と、4章で示した山形花笠まつりの参加団体の変遷を踏まえ、各市町において花笠踊りがどのように用いられているのかを考察する。具体的には、花笠踊りを取り入れた過程と、その後の花笠踊りのパレードの変遷を分析する。その上で、山形県における花笠踊りの受容と変遷について考察する。

5-1 山形県内における花笠踊りの取り入れ

花笠踊りは各市町において、踊りの発祥地である自治体における祭りへの取り入れと、地域振興のための取り入れがみられた。それぞれの取り入れかたがみられる市町において、継続して開催がされたことから、花笠踊りを踊ることは、市民が参加する催しとして定着していたことが読み取れる。

本稿で事例とした山形県における各自治体での花笠踊りのパレードは、発祥の地であるかど

うかに関わらず、地域の祭りを盛り上げるために取り入れられた点が共通していると考えられる。こうした地域振興や地域の祭りの盛り上がりを目的とした、共同性のシンボルとなるようなものを用いた動きは、阿南（1986）や内田（2001）などにおいて議論されてきた、日本の各地における新しい祭り、あるいは既存の祭りへの新たな催しの導入と共通する点であるといえる。また、山形花笠まつりに参加する団体の変遷をみると、企業の従業員や地縁組織の参加が中心であった。この祭り当初における参加団体の特徴も、地域振興を目的とした祭りの創出と共通する点であると考えられる。

5-2 県内各地における花笠踊りのパレードの変化

前節で示したように、山形県内における花笠踊りのパレードを取り入れる動きは、各地の地域振興を目的としたものであることがわかる。そして、こうした花笠踊りのパレードを用いた催しは、継続して執り行われていく中で、引き続き行われるものと、パレードが異なる催しに統合されるものがみられた。

継続された催しは、その催しが行われる地域で恒例のものになっていることが、尾花沢市や天童市における広報や市史といった刊行物における祭りの表現から捉えられる。加えて、尾花沢市では、祭りの名称にも用いられるようになっていく。このことから、花笠踊りを踊ることや、パレードに参加したり観覧したりすることが各地において定着したと考えられる。

また、山形花笠まつりに参加する団体の変遷から、催しを取り入れた当初の目的とは異なる理由で参加する人々がみられるようになったことがわかる。たとえば、学校の参加からは、地域との交流や、児童・生徒の教育、思い出のためと捉えることができる。また、ダンス教室などの参加からは、その教室やサークルでの練習の成果の機会としてパレードが捉えられているといえる。これらのことから、山形花笠まつりは、観光振興という要素に加えて、参加者が自らの所属する団体におけるイベントとして認識されるようになったと考えられる。

一方で花笠踊り単体のパレードとして行われなくなった市町については、花火大会や、その地域にゆかりのある歴史上の人物に関する催しをメインとした祭りに、花笠踊りのパレードの内容が組み込まれることになった。たとえば大石田町では、住民が観覧するものとして、花火大会が定着していると考えられる一方で、花笠踊りによるパレードについては、住民が参加していた「大石田を10倍楽しくする会」において、その催しの再編の必要性が協議されることになった。米沢市においては、山形県全体の踊りとしての花笠踊り以上に、米沢市にゆかりのある歴史上の人物である上杉鷹山公が、阿南（1986）が時代まつりを事例に示したような、米沢市の地域のアイデンティティをより表象するものとして捉えられるようになったと考えられる。こうした動きからは、祭りにおいて集められた様々な催しの中で、どの催しが希求されるようになったのが祭りの内容の再編というかたちで表出したと考えられる。そして、祭りの内容の再編において地域のアイデンティティをより表象するものが強調されるようになった

ことによって、花笠踊りによるパレードはその催しに付随するものとして捉えられるようになったと考えられる。

5-3 山形県における花笠踊りの受容と変遷

本稿で事例とした山形県における各自治体での花笠踊りのパレードは、祭りを盛り上げるために取り入れ、その後は各地における催しの希求によって、継続されるか、祭りの再編によって別の催しに組み込まれるかという選択がなされていた。以上の山形県内における花笠踊りを用いた催しの動きからは、各地域の祭りにおいて強調されるものに変化が生じたことによって、踊りの受容と、踊りを用いた催しの変遷が生じたと考えられる。

祭りなどの舞台でのシンボルを持たない地域においては、長年にわたり継続されることによって、花笠踊りのパレードがその地域の祭りの目玉の一つとして機能するようになっていくと考えられる。こうした花笠踊りのパレードの受容は、内田（2002）が示すような、地域のシンボルを持たない地域で、縁のない踊りが受け入れられていったという議論で示されてきたことであるといえる。加えて、山形花笠まつり以降に花笠踊りを取り入れた祭りにおいては、山形を代表するものであるという花笠踊りに対する山形県内外からのまなざしも影響していると考えられる。さらに、山形花笠まつりにおける参加団体の変遷からは、催しが定着していく中で、花笠踊りのパレードが、地域のシンボルによる催しとしてはもちろんのこと、学校や企業からの踊り手にとっての恒例行事として認識されるようになったと考えられる。

一方で、祭りの内容が再編された事例からは、地域の祭りを構成する要素に対して、その地域を表象するものであることが求められたと考えられる。そして、地域においてより希求されるものが見出されるようになるまで、花笠踊りのパレードは住民が参加する催しとして、地域の祭りの盛り上がりには寄与していたといえる。

山形県内各地において、祭りの盛り上がりを求める動きの中で花笠踊りが取り入れられたことは、阿波踊りやよさこいを事例とした先行研究での議論と一致しているといえる。しかし、上述した通り、こうした動きについては、祭りの盛り上がりを求めて用いた催しが、共同性のシンボルとしての役割を継続する場合もあれば、継続しない場合もあることも考えられる。そうした踊りを取り入れた地域の祭りをそれぞれ捉えていくと、地域のアイデンティティをどのように表していくか、または地域住民が祭りにおいて何を希求するのかという観点から、踊りを主要な催しとして捉えるかどうかを選択されていると考えられる。

6 おわりに

本稿では、山形県における花笠踊りを事例に、各市町における花笠踊りのパレードがどのように用いられてきたかを分析し、花笠踊りの受容とその変遷について考察した。その結果は以下のように整理される。

山形県における徳良湖の築堤工事の中で生まれた花笠踊りは、発祥の地とされる尾花沢市や大石田町では、それぞれ笠廻しや手踊りといった踊りの種類が、自治体が運営する市民祭りに取り入れられていった。こうした動きの中で、山形県における代表的な踊りとなりつつあった花笠踊りは、各地の踊りを参考にした種類を創出し、山形市で開催する地域振興を目的とした山形花笠まつりのパレードの中で踊られるようになった。この山形花笠まつりや尾花沢市での花笠パレードなどといった催しの盛り上がりは、他の自治体でも参考とされ、花笠踊りのパレードが祭りに取り入れられるようになった。

こうして伝播した花笠踊りのパレードは、地域で執り行われる、または住民が参加する恒例行事として浸透する一方で、他の踊りも含めたパレードに組み込まれるといったかたちで、花笠踊りのみのパレードが行われなくなった地域がみられる。こうしたパレードを行わなくなった地域では、花笠踊り以外に地域のシンボルが存在しており、そのシンボルを用いた主要な催しによって祭りの内容を再編することで、その地域のアイデンティティをより強調するようになったと考えられる。

山形市という県庁所在地で行われている、山形花笠まつりの主な催しは花笠踊りによるパレードである。このことは、花笠踊りは山形県を代表するものとして捉えられる一方で、山形市からは距離があり、他のシンボルを持つ地域では、あえて花笠踊りを用いる必要がないと捉えることもできる。こうしたシンボルを持つ地域において、山形県における代表的な踊りとして捉えられるようになった花笠踊りは、先行研究で示されてきたような、祭りの盛り上がりを求めるという側面を強く受けて取り入れられたといえるだろう。

本稿の課題として、分析の対象とする花笠踊りが披露される舞台が、地域の祭りのみに限定された。花笠踊りは、学校等の行事においても児童、生徒によって習得され披露されている。そして学校の児童、生徒の参加は、今日の花笠踊りのパレードの存立にも影響を与えていると考えられる。地域文化の特質を捉える上では、こうした学校の教育活動における踊りの取り入れられ方についても検討が必要である。

<注>

- 1) この踊りには「手振踊り」という呼び方もみられる。
- 2) 尾花沢町広報委員会編『町報おばなざわ』、第 25 号、尾花沢役場、1956 年、1 面。
- 3) 尾花沢町広報委員会編『町報おばなざわ』、第 40 号、尾花沢役場、1957 年、2 面。
- 4) 尾花沢市広報委員会編『市報おばなざわ』、第 9 号、尾花沢市役所、1959 年、1 面。
- 5) 市長公室編『市報おばなざわ』、第 187 号、山形県尾花沢市役所、1970 年、1 面。
- 6) 企画課『市報おばなざわ』、第 513 号、山形県尾花沢市役所、1996 年、2 面-3 面。

- 7) 北村山郡大石田町役場編『町報おおいしだ』、第 27 号、北村山郡大石田町役場、1957 年、4 面。
- 8) 北村山郡大石田町役場編『町報おおいしだ』、第 38 号、北村山郡大石田町役場 1958 年、2 面。
- 9) 山形県北村山郡大石田町編『広報おおいしだ』、第 77 号、山形県北村山郡大石田町 1961 年、2 面。
- 10) 山形県北村山郡大石田町役場編『広報おおいしだ』、第 136 号、山形県北村山郡大石田町役場、1967 年、8 面。
- 11) 山形県北村山郡大石田町役場編『広報おおいしだ』、第 145 号、山形県北村山郡大石田町役場、1968 年、5 面。
- 12) 大石田町編『広報おおいしだ』、第 186 号、山形県大石田町、1971 年、6 面。
- 13) 大石田町企画課編『広報おおいしだ』、第 325 号、山形県大石田町、1983 年、8 面。
- 14) 大石田町企画課編『広報おおいしだ』、第 326 号、山形県大石田町、1983 年、7 面。
- 15) 大石田町企画課編『広報おおいしだ』、第 533 号、大石田町企画課、2000 年、2 面-3 面。
- 16) 大石田町企画課編『広報おおいしだ』、第 541 号、大石田町企画課、2001 年、3 面。
- 17) 天童市編『市報てんどう』、第 406 号、天童市、1971 年、6 面。
- 18) 天童市編『市報てんどう』、第 792 号、天童市、1987 年、11 面、天童市編『市報てんどう』、第 864 号、天童市、1990 年、12 面。
- 19) 企画部広報課『広報よねざわ』、828 号、米沢市、1988 年、8 面。
- 20) 米沢市企画調整部秘書広報課『広報よねざわ』、1139 号、米沢市、2001 年、2 面-3 面。
- 21) 米沢市企画調整部秘書広報課『広報よねざわ』、1163 号、米沢市、2002 年、2 面-3 面。
- 22) 米沢市企画調整部秘書広報課『広報よねざわ』、1230 号、米沢市、2005 年、3 面。

<引用文献>

- 阿南 透（1986）「歴史を再現する」祭礼」、『慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要：社会学心理学教育学』、26 卷、23 頁-32 頁
- 阿南 透（2021）「創生される都市祭礼」、新谷直紀編『講座日本民俗学 3 行事と祭礼』、朝倉書店、226 頁-237 頁
- 内田忠賢（2001）「都市の伝統と現代—よさこい祭りの伝播（前半）」『地理』、42 卷、90 頁-95 頁
- 内田忠賢（2002）「都市の伝統と現代—よさこい祭りの伝播（後半）」『地理』、47 卷、76 頁-81 頁
- 尾花沢市史編纂委員会（2010）『尾花沢市史 下巻』、尾花沢市
- 市制施行五十周年記念誌編集委員会（2008）『天童市史—市制施行五十周年記念』、天童市
- 星川茂平治（1983）『徳良湖と花笠音頭』、星川茂平治
- 松平 誠（1996）「東日本における阿波踊りの新展開」『生活学論叢』、1 卷、28 頁-40 頁
- 森田真也（2022）「エイサーの舞台へ」、森田真也・城田 愛『踊る「ハワイ」・踊る「沖縄」—フラとエイサーにみる隔たりと繋がり』、明石書店、120 頁-141 頁

矢島妙子（2015）『「よさこい系」祭りの都市民俗学』、岩田書院

山形県花笠協議会（2012）『山形花笠まつり：舞った魅せた 50 年—山形花笠まつり 50 年のあゆみ』、山形
県花笠協議会

山形花笠まつり 30 年史刊行委員会（1992）『紅の里に笠が舞う—山形花笠まつり 30 年のあゆみ』、山形
県花笠協議会

主指導教員（堀健彦教授）、副指導教員（北村繁教授・前田洋介准教授）